



クローズアップ薬用植物(その6): ナツメ(棗)、サネトナツメ(核太棗)

学名: *Zizyphus jujuba* var. *inermis*  
和名: ナツメ(棗)  
園内植栽場所: 32号園

クロウメモドキ科ナツメ属の落葉小高木。初夏になってから芽を出すため、「夏芽」がその和名の由来のようです。

葉は卵形で縁は鈍鋸歯、質はやや堅く、光沢があります。小枝に柄の短い単葉を平面的に互生するため、花を咲かせて果実を实らせるまで、羽状複葉のようにも見えます。

6月下旬には、葉の脇に淡黄色の小花を集散花序で密生させます。

果実は楕円形の核果(かく)で、初めは淡緑色ですが、熟すと褐色になります。



熟してきたナツメの果実  
<32号園, 2014.10.07 撮影>



ナツメの花と若い果実  
<32号園, 2014.06.26 撮影>



果実が大きくなったナツメ  
<32号園, 2014.09.17 撮影>

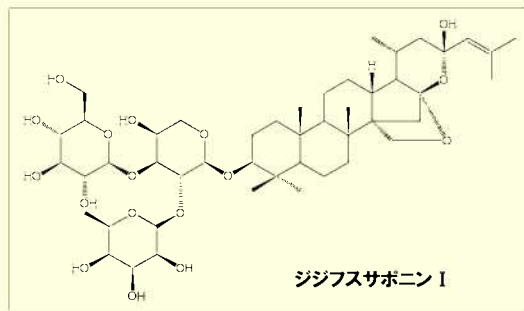
生薬の基原植物として

\* ナツメの果実は生薬「タイノウ(大棗)」として、  
\* サネトナツメの種子は生薬「サンソウニン(酸棗仁)」として、  
共に、日本薬局方に収載されています。

生薬「タイノウ(大棗)」について

【主要化学成分】

糖質: フルクトース、グルコース、スクロース、ジジフスアラビナン(多糖類)  
有機酸: リンゴ酸、酒石酸、クエン酸  
トリテルペノイド: オレアール酸、ウルソール酸、ペツリン酸  
サポニン(タンニン型トリテルペン系): ジジフササポニン、ジュジュボシド  
サイクリックAMP(一般植物の1,000倍)



ジジフササポニン I

学名: *Zizyphus jujuba* var. *spinosa*  
和名: サネトナツメ(核太棗)  
園内植栽場所: 1号園下斜面



鋭いトゲが特徴的なサネトナツメ  
<1号園下斜面, 2014.08.08 撮影>

ナツメ同様にクロウメモドキ科ナツメ属の落葉小高木で、幹の太さや枝振り、葉や果実の大きさまで、全体的にナツメより一回り小振りです。

特徴的な相違点は、小枝や葉の付け根の脇に鋭く尖った棘(トゲ)がある点で、学名の変種名 "*spinosa*" は、ラテン語で「トゲの多い」との意味を表しています。

ちなみに、ナツメの変種名 "*inermis*" は「武器のない(=トゲのない)」の意味です。

この様に変種名に限らず、学名を構成する属名や種小名に用いられているラテン語の意味が、その種や植物の特徴を表しているケースは少なくありません。

次にご紹介する写真は、ナツメとサネトナツメの果実を半分に切り分けて撮影したものです。

果実の大きさの違いとともに、其々の核(かく)の大きさに注目してください。核とは、果実の内果皮が硬化して内部の種子を保護するもので、一般に種(たね)と呼んでいる部分です。

いかがでしょうか。サネトナツメの実は小さくても、中果皮(果肉)が薄く、核が大きいことが見て取れます。もうお解りですね。サネト(核太)ナツメの名の由来が、

なお、右欄にて解説のある生薬名「タイノウ(大棗)」と「サンソウニン(酸棗仁)」の漢名に用いられている「棗」の字は棘(トゲ)の意を表し、また、「サンソウニン(酸棗仁)」の「酸」は、その果実がナツメと比べて酸っぱいことを示しています。

今までサネトナツメの実を口にしたことなかった職員Mですが、上記を執筆するにあたり急ぎ試食に挑みました。

その答は、「中国人噛つかないアルー!」。ただし、酸っぱくて口にできないという程ではなく、ナツメ同様の甘みもしっかり味わえます。評価としては、上述の通り実が小さい上に種(たね)が大きいので、「食べられる果肉部分が少ないので生食には適さない」と評しておきます。

一方、今年のナツメは豊作でした。その上、夏場の降水量が多かったからでしょうか。熟した果実には例年になく汁気が多く甘みもタップリ。今号でナツメが当欄に選ばれた理由とその美味しさとの因果関係は、職員M以外に知る者はなし…。



上: サネトナツメの果実  
下: ナツメの果実

【薬効】

生薬はそれぞれ独特な味(薬味)を有しており、その味によって五味「酸(さん)」、「苦(く)」、「甘(かん)」、「辛(しん)」、「鹹(かん)」に分類され、薬効に関連しています。

タイノウ(大棗)は、糖分を豊富に含んでおり、甘い味がします。甘味は激しいものを緩め(緩和)、体力や気力を補う作用があり、脾胃の機能を補います。このことから、タイノウ(大棗)は滋養強壮作用を示します。

【用途】

緩和薬として、筋肉の急迫、腹痛などに用いられます。また、滋養強壮薬として、倦怠感、食欲不振、精神不安などに応用されます。

【漢方処方】

タイノウ(大棗)は、風邪、胃腸機能、精神不安などの改善を目的とした漢方処方に配合されています。

風邪に対する処方として、葛根湯、桂枝湯、小柴胡湯、柴胡桂枝湯、麦門冬湯など、胃腸機能の改善を目的とした処方として、四君子湯、六君子湯、小建中湯、補中益気湯など、また精神不安に対しては、甘麦大棗湯、半夏瀉心湯、柴胡加竜骨牡蠣湯、桂枝加竜骨牡蠣湯などに含まれています。

葛根湯(葛根、麻黄、桂皮、芍薬、大棗、甘草、生姜)

風邪の引き初めに対するもので、麻黄と桂皮により強い発汗を促し、そして葛根により肩から首筋のこりを取り除いて改善する処方です。また、芍薬と甘草の組合せで体の筋肉の緊張を和らげます。さらに、大棗、生姜、甘草の組合せで胃腸機能を高め、体力の回復を期待します。

四君子湯(人參、茯苓、甘草、蒼朮、大棗、生姜)

虚弱で疲れやすく、顔色が悪い者の胃もたれ、食欲不振を改善する処方です。人參の滋養強壮効果を、大棗、生姜、甘草の組合せによる胃腸機能亢進作用でさらに高めるとともに、胃もたれの原因の一つである胃内の水の停滞を茯苓と蒼朮で改善します。

半夏瀉心湯(黄連、黄芩、半夏、乾姜、大棗、人參、甘草)

みぞおちがつかえ、悪心、嘔吐があり食欲不振を有する者の神経性胃炎、胸やけ、不安神経症の改善を目的とした処方です。ストレスによる胸のつかえを黄連と黄芩の2つ冷ます生薬で緩和し、胸のつかえに伴う悪心・嘔吐は半夏で解消する。さらに、乾姜、大棗、人參、甘草で胃腸機能を高めながらストレス胃炎を改善します。

上の漢方処方解説したとおり、大棗が配合されている処方には、併せて生姜(乾姜)、甘草がセットで配合され、胃腸を温めながらその機能を高めています。

\* 大棗+甘草: 胃腸系を補い、精神を安定させる。

\* 大棗+生姜: 胃腸を温め、機能を整える。

秋に果実を实らせる薬用植物(一部抜粋)

学名: *Cassia obtusifolia*  
和名: エビスグサ(翼蓼)



<12号園, 2014.10.01 撮影>

エビスグサの種子は、生薬「ケツメイシ(決明子)」として、日本薬局方に収載されています。

夏には黄色い五弁花を咲かせ始め、秋には弓状に曲がった細長い豆果(とうか)＝莢果(きょうか)を实らせます。草丈も1m以上になるので、夏から秋にかけての存在感は十分です。

学名: *Lycium chinense*  
和名: クコ(枸杞)



<51号園, 2013.10.30 撮影>

クコの果実は生薬「クコシ(枸杞子)」クコの根皮は生薬「ジコツピ(地骨皮)」として日本薬局方に収載されています。

夏から初秋にかけて葉腋(ようえき)に直径1cm程の小さな薄紫色の五弁花を咲かせます。果実は長径1-1.5cm位の楕円形で、熟すと鮮やかな赤色になります。

学名: *Gardenia jasminoides*  
和名: クチナシ(梔子)



<2号園, 2014.10.07 撮影>

クチナシの果実は、生薬「サンシシ(山梔子)」として、日本薬局方に収載されています。

開花期は6-7月、芳香の強い白い花はご存知の方も多いのでは…。果実が熟しても割れないことから「口無し」がその名の由来とされています。外にも諸説あるようです。

学名: *Euodia ruticarpa*  
和名: ゴシュユ(呉茱萸)



<9号園, 2014.10.07 撮影>

ゴシュユの果実は、生薬「ゴシュユ(呉茱萸)」として、日本薬局方に収載されています。

8月頃、枝先に散房花序(さんぼうかじょ)で黄白色の小花を咲かせます。果実は扁球形の蒴果(さくか)で、熟すと赤褐色に色づきます。果皮には多数の油腺があり、特有の匂いがします。

学名: *Coix lacryma-jobi* var. *mayuen*  
和名: ハトムギ(鳩麦)



<13号園, 2014.09.08 撮影>

ハトムギの種子は、生薬「ヨクイニン(蓴苢仁)」として、日本薬局方に収載されています。

河原で目にするジュズダマとは同種で、栽培用の変種になります。よく似ていますが、ジュズダマは多年草で、ハトムギは一年草。また果実の形が細長く、果皮も少し柔らかい、等の違いがあります。

学名: *Cornus officinalis*  
和名: サンシュユ(山茱萸)



<ハウス横斜面, 2013.11.13 撮影>

サンシュユの偽果の果肉は、生薬「サンシュユ(山茱萸)」として、日本薬局方に収載されています。

春先に葉より先に咲かせる黄色い花の横よりハルコガネバナ(春黄金花)、また、晩秋に実らせる紅色楕円形の果実(偽果)を珊瑚にたとえてアキサンゴ(秋珊瑚)の別名があります。

学名: *Citrus aurantium* var. *daidai*  
和名: ダイダイ(橙)



<8号園, 2014.10.07 撮影>

ダイダイの果実は生薬「キジツ(枳実)」ダイダイの果皮は生薬「トウヒ(橙皮)」として日本薬局方に収載されています。

写真右上の橙色の果実が昨年より落果せずに残っているもので、左下の青い果実が今年結実したものです。新旧の果実が一つの木に生ることから「代々(だいたい)」がその名の由来。

学名: *Crataegus cuneata*  
和名: サンザシ(山楂子)



<51号園, 2014.10.07 撮影>

サンザシの偽果は、生薬「サンザシ(山楂子)」として、日本薬局方に収載されています。

開花期は4-5月、枝先に白い五弁花を散房状に咲かせます。果実(偽果)は扁球形のナシ状果で、9-10月の成熟期になると短期間で真っ赤に色づき熟かされます。

編集後記

薬草園だより「10月号(第5刊)」は、いかがでしたでしょうか。

前号までは、アイキャッチャーとしての華麗さを意識して花の写真を中心に掲載してきました。今号は、クローズアップ薬用植物にナツメの果実を採り上げたのを機会に、上欄もすべて果実特集として編集してみました。

一般的に果実というと、果物のようにそのままプリと噛り付けるイメージが強いのですが、…食いしん坊の職員Mだけでしょうか!?、今回採った果実を見比べるだけでも、その有り様が様々だと感じていただけたらと思います。

専門的には、果実は乾果(熟したときに果皮が乾燥するもの)と液果(果皮が柔らかく汁気の多いもの)に大きく二分され(一部に例外あり)、更に、乾果は閉果・裂開果、液果は核果・真正液果、等々とまだまだ細かく分類されます。

なお当園では、本紙第3刊にて登場したキウイフルーツ(オニマタタビの果実)を皮切りに、今がまさに旬のクリ(栗)やザクロ(石榴)にカキ(柿)、収穫時期はまだ先ですがユズ(柚子)にミカン(蜜柑)、また少々珍しいところではフェイスアなどか此処彼処でその果実を实らせています。

食欲の秋です。食指が動いた方は、ぜひ当園まで足を延ばしてくださいね! ちなみに、果物がどっさり収穫できた時は、KPCへのシャトル便に載せて園長にお届けしています。これからの時期、神谷先生の教員室をちょこちょこ覗いてみたら、何かいい事が起きるかも。…ですよね、神谷園長!!

【お知らせ】



15号園の新設温室

中には既に鉢植植物が所狭しとギンツリと、バナナにマンゴー、カカオ等、学生さんに喜んでもらえそうな熱帯果樹も植付けていく予定です。

本紙に対するご意見・ご感想、記載内容の誤り等のご指摘がございましたら、お手数ですが下記連絡先までお願いします。

有瀬キャンパス内  
薬用植物園 美甘康仁(内線: 2719)  
E-mail: mikamo@pharm.kobegakuin.ac.jp



少々残念なお知らせにはなりますが、当園の第六区にある大温室が11月には取り壊される事になっています。

現在、中にある植物を取捨選択しながら鉢に取り、移転作業を進行中。今まで世話をしてきた植物だけに全部を移してやりたい思いはあれども、引っ越し先の新設温室のスペースにも限りがあります。

また折角の機会だからこの機に新たな植物も導入・植栽しなくてはと、既に空きスペースがなくなりつつある温室を前に職員Mの頭の中は混沌としています。

来年の夏までには責任をもって、新設温室内を完成形に仕上げていきますので、どうか皆様、乞うご期待。